

反実仮想とフィクション

——実在する物個体をめぐって——

伊佐敷 隆弘

本論文において明らかにしたいことは、「実在する物个体¹が反実仮想に必ず現れるのに対し、フィクションにはまったく現れない」ということである。そのために、まず、反実仮想のポイントが、「実在する物個体の性質や関係について何事かを主張すること」であることを示す(2節)。次に、「細部の不確定性」、「変更明示の原則」、「履歴への追加」、「性質間の含意関係」に関して反実仮想とフィクションを比較し、「王貞治」や「ロンドン」のような実在する物個体の名前がフィクションに登場するケースについて検討する(3節)。ただし、本論文の関心は言語表現それ自体ではなく、あくまでもその存在論的含意にある。

1. 反実仮想とフィクションの例

我々人間は、現実について語るだけでなく、反実仮想やフィクションの場合のように現実とは異なる事態について語ることがある。まず、それらの例を以下に挙げる。それぞれ主語に単称名辞(singular term)が使われている文(①③⑤)と一般名辞(general term)が使われている文(②④⑥)を挙げてある。

(a) 現実について語る。(nonfiction)

①「ロンドンはイギリスの首都である。」

②「カンガルーは袋で子供を育てる。」

(b) 反実仮想²(counterfactual supposition)

③「もしイチローが野球をしていなかったら、(彼は渡米しなかったかもしれない。)」

④「もしカンガルーに尻尾がなかったら、(カンガルーは倒れるだろう。)」

(c) フィクション³(fiction)

⑤「ホームズはロンドンに住んでいる探偵である。」

⑥「竜は口から火を吹く。」

反実仮想もフィクションも現実と異なる事態を描いているという点では同じである。現実にはイチローは野球をしており、カンガルーには長い尻尾がある。また、ホームズという探偵も竜という生き物も我々の住むこの現実世界には存在しない。では、反実仮想とフィクションはどう異なるのか。両者は、実在する物個体がそこに現れているか否かという点で異なる。即ち、反実仮想には実在する物個体が必ず現れるが、フィクションにはまったく現れない。このように考えるべき理由を以下説明して行こう。

2. 反実仮想の場合

(1) 反実仮想と実在する物個体

反実仮想は、現実と異なる事態を想定するものではあるが、同時に、その想定は現実の世界についての想定である。例えば、上の「イチロー」や「カンガルー」に関する反実仮想（③④）の場合、現実と異なる事態が想定されているのは、あくまでも実在する物個体であるイチローやカンガルーについてである。確かに「尻尾のないカンガルー」は実在しない。しかし、「もしカンガルーに尻尾がなかったら、（カンガルーは倒れるだろう）」という想定は（尻尾を持つ）実在の物個体であるカンガルーについてなされている。この反実仮想文の実質的内容は、「尻尾のおかげでカンガルーは倒れないでいられるのだ」ということであり、即ち、この文は、実在するカンガルーとその尻尾の関係について述べている。そして、この関係は、カンガルーが直立していることの原因、或いは、カンガルーの直立を可能にしている構造であるが、いずれにしても、それはカンガルーが持つ複数の性質（直立と尻尾の所有）の間に現実になり立っている関係⁴である。要するに、反実仮想は、実在する物個体について、それが現実持っている性質や関係に関して何事かを主張するために用いられている。

(2) 反実仮想における物個体の同一性

反実仮想とはいかなる営みなのか、さらに詳しく見て行こう。反実仮想にお

いて我々は実にさまざまな想定をする。例えば、イチローに関して「野球をしていなかったら」以外に「サッカーをしていたら」、「身長があと10センチ高かったら」、「20年前に生まれていたら」、「女だったら」などいろいろな想定をし、そこからの帰結を想像してみたりする。しかし、これらのすべてが実在するイチローについての想定であるのはなぜなのか。それは、これらの想定において「イチローの個体的本質(individual essence)」が維持されているからであろうか。「個体的本質」とは「当該個体だけが持ち、かつ失うことが不可能な性質」であるが、例えば、「イチローの個体的本質」の一部に「男だ」ということが含まれるなら、「もしイチローが女だったら」という反実仮想は実在するイチローについての想定ではない（即ち、不可能な想定だ）ということになるのであろうか。

そうではない。なぜなら、反実仮想によって変更される性質（変更性質）とそれ以外の変更されない性質（固定性質）との間の境界線は、異なる反実仮想を行なう度ごとに異なってよいからである。例えば、「もしイチローが野球をしていなかったら」という反実仮想の場合、変更されたのは「野球をする」という性質であり、それ以外の性質はもとのままだと想定されている⁵。他方、「もしイチローの身長があと10センチ高かったら、(ホームランバッターになっていただろう)」という反実仮想をする際に変更されたのは「身長」に関する性質であり、「野球をする」という性質は変更されていない。このように、反実仮想は、その度ごとに、現実世界に実在する物個体を出発点として、当該物個体を持っている性質を変更性質と固定性質とに分けるのである。したがって、イチローに関するすべての反実仮想を通じて常に固定性質であるような性質（個体的本質はその一部である）が存在しなくても、それら多様な反実仮想のいずれもが実在のイチローについての想定であるということは可能である。

では、それらの多様な反実仮想が実在のイチローについての想定であるのはなぜか。それは、我々がそれらの反実仮想を行なう度ごとにそう約定するから⁶であろう。反実仮想において我々が行なっていることは、「まず実在の物個体を対象として取り上げ、次にその性質の一部を変更する」ということであって、「まず或る性質を持つ物個体を想像し、次にその物個体が何らかの実在の物個体と同一であるかを考える」というようなことではない。「イチローが女だった

ら、(やはり野球をやっていただろう)」という反実仮想の際、我々は、実在するイチローを対象として取り上げ、その性質の一部を変更した上で、イチローの変更前後の性質を比較することにより、この想定からの帰結を想像するのである。そして、この反実仮想文が主張しているのは、「イチローの野球への愛情と能力は彼の性別とは無関係だ」ということであり、これは、(カンガルーの尻尾の場合と同様に) 現実にイチローが持っている性質(即ち、野球への愛情、能力、性別)についての主張である。

ただし、この約定はまったく無制限に行なえるわけではない。一つの物個体の持つすべての性質を一挙に変更する(即ち、固定性質をまったく残さない)ような想定は不可能である。そのとき元の物個体とのつながりは消える。それゆえ、「イチローは今持っている性質をすべて失ってもやはりイチローであろう」と言うことはできない。では、一步一步、性質を変更して行き、最終的に元の物個体とは似ても似つかない物個体を想定することはできないか。イチローについてまず「野球をしない」と想定し、次に「天才的頭脳を持つ」と想定し、次に「女である」と想定し、…という風に想定を繰り返し最後にはイチローが現実に持っているほとんどの性質を失ってしまった別の別人になるという反実仮想を行なうことはできないか。できないであろう。反実仮想は、その度ごとに、現実世界に実在する物個体について行なわれるのだから、「まず、イチローが野球をしないと想定しよう。次に、この野球をしないイチローが天才的頭脳を持つと想定しよう」と言った場合、実は2回の反実仮想が順に行なわれているのではなく、「イチローが野球をせず、かつ、天才的頭脳を持つ、と想定する」という1回の反実仮想が行なわれているのである。要するに、反実仮想はその都度現実に戻って行なわれるのである⁷。

(3) 存在に関する反実仮想

反実仮想において物個体の「すべての性質を一挙に変更することは不可能だ」と上で述べた。では、物個体の性質ではなくその存在をまるごと変更する、即ち、存在を抹消することも不可能か。しかし、我々は実在する物個体について、それが実在していないと想定することがあるが、そのとき我々は何をやっているのか。

例えば、「もしソクラテスがいなかったら、(プラトンは哲学者にならなかつただろう)」という反実仮想においてその非実在が想定されているのは実在のソクラテスについてなのか。もしそうなら、「このソクラテスは実在し、かつ実在しない」という矛盾が生じていないか。そうではない。この反実仮想文全体が主張していることは、実在のソクラテスと実在のプラトンの間に現実にあった関係、即ち、「プラトンが哲学を始める上でソクラテスが大きな影響を与えた」ということである。つまり、前述の「カンガルーの直立」と「尻尾の所有」の間の関係と同様、この文が主張していることは、あくまでも実在する物个体(プラトンとソクラテス)の間の関係についてであって、実在のプラトンと非実在のソクラテスの間の関係についてではない。この文において「ソクラテス」という固有名を使ったところで実在のソクラテスを指示する仕事は既に済んでおり、その後で反実仮想が行なわれているのである。要するに、実在する物个体についてその非実在を想定する反実仮想文において主張されているのは、実在する物个体間の関係である。

では、逆に、実在しない物个体の実在を想定する場合はどうか。例えば、「もし火星人がいたら、(タコのような姿はしていないだろう)」という反実仮想文は、実在しない「火星」に関する主張をしているのか。そうではない。もしそうなら、実在しない物个体にはどんな性質でも任意に想定しうるだろうから、この想定からはいかなる帰結をも引き出せることになってしまうだろう。しかし、この反実仮想文の「タコのような姿はしていない」という帰結に対してその根拠を求めた場合、例えば「タコのような足では火星の重力に耐え切れないから」という答えが得られるだろうが、この答えは、この帰結が実在の火星に関する事実から推論されたものであることを示している。要するに、この反実仮想文は、実在の火星や生物の構造に関する主張をしている。結局、実在しない物个体(火星)の実在を想定する反実仮想文においても、実在する物个体(火星や生物)の性質に関する主張がなされている点に変わりはない。

以上要するに、反実仮想とは、実在の物个体が現実に持っている性質や関係について何事かを主張するために用いられるのであり、そこには必ず実在の物个体が現れる⁸⁾のである。

3. フィクションの場合

(1) 細部不確定性（フィクション）と変更明示の原則（反実仮想）

次に、反実仮想に現れる物個体（例えば③のイチロー）とフィクションに現れる物個体（例えば⑤のホームズ）との間にどんな違いがあるか見ていこう。

第一に、細部の確定性に関する違いがある。即ち、反実仮想に現れている物個体「イチロー」は実在するイチローであるから、記述されていない細部も、我々が知らないだけで、その内容は確定している。例えば、イチローの背中にほくろがあるか否か我々は知らないが、それはどちらかのはずである。これに対し、フィクションに登場する物個体「ホームズ」の場合、フィクション中で記述されていない細部の内容は確定していない。だから、ホームズの背中にほくろがあるか否かは物語中で記述されない限り（或いは、記述された他の性質から推論できない限り）、確定していない。このように、物個体の細部が、反実仮想では確定しているのに対し、フィクションでは不確定だという違いがある⁹。

同じことは「イチロー」や「ホームズ」のような単称名辞でなく、「カンガルー」のような一般名辞が使われている場合についても言える。反実仮想（例えば④）に現れる物個体「カンガルー」は実在するカンガルーであるから、我々が知らないその細部の性質（例えばカンガルーの袋の中がどうなっているか）も確定している。他方、フィクション（例えば⑥）に現れる物個体「竜」の場合、フィクション中で記述されていない細部の性質（例えば竜の口の中がどのような仕組みになっていて火が吹き出されるのか）は確定していない。このように一般名辞が使われている場合もやはり、物個体の細部の確定性に関して両者は異なっている。

第二の違いは変更明示の原則の有無である。即ち、反実仮想において、変更される性質は明示されなければならない、明示されない部分は原則的に固定性質だと推定される¹⁰。反実仮想の場合、あらかじめ明示されていない変更性質から何らかの帰結を引き出すことは「ルール違反」と感じられるだろう。例えば、次の会話を想像してみよ。「もしカンガルーに袋がなかったら、カンガルーは倒れるだろう」「え？なぜ？」「袋と一緒に尻尾もなくなったのさ！」。前述のように、反実仮想文においては、実在する物個体が持つ性質の一部が変更され、

変更前後の性質を比較することを通して、その物個体が現実を持っている性質について何事かが主張される。したがって、反実仮想からの帰結を正当化するためには、変更性質と固定性質の境界がどこに引かれたのかを明示することが必要である。今挙げた会話例においては、境界があらかじめ明示されることなしに帰結が主張されたので「ルール違反」と感じられるのである。このように、反実仮想には変更明示の原則が伴う。

これに対し、フィクションに変更明示の原則は伴わない。フィクションは現実から出発するのではなく、独自の世界を創り出すのであるから、もともと「変更」という概念は当てはまらない。尤も「竜」という名前を見た読者は、「これは火を吹く生き物だな」という受け止め方をするだろうが、ストーリーが進むに従って意外な事実（例えば、その竜が実は生き物ではなくロボットであったということ）が明らかになっても、それは読者にとって「意外」ではあっても、「ルール違反」とは感じられないだろう。

(2) フィクションに登場する実在の人物名・地名・自然種名

「実在する物個体がフィクションにはまったく現れない」という本論文の主張に対して次の反論がただちに考えられる。即ち、「確かにホームズや竜は実在の物個体ではない。しかし、実在する物個体の名前がフィクションに現れる場合、それらはやはり実在の物個体を指示しているのではないか。例えば、野球漫画に登場する『王貞治』という名前は実在の王貞治氏を指示しているのではないか」。このような反論である。

確かに、『巨人の星』という野球漫画に登場する「王貞治」という人物は実在の王貞治氏と同様に一本足打法でホームランを打っていたし、顔もよく似ていた。しかし、当然のことだが、漫画の中の「王貞治」の言動やエピソードが実在の王貞治氏の履歴に追加されることは決してない。もし、漫画の中の「王貞治」のせりふについて、実在の王貞治氏に「どんなつもりであのような発言をしたのですか」と尋ねたら、「この人はフィクションと現実の区別ができないのかな」と不審がられるであろう。このように、履歴への追加の不可能性を踏まえれば、野球漫画に登場する「王貞治」は、(実在の王貞治氏を「モデル」にして創られたのではあるが、) 実在の王貞治氏とは別物であると考えられる¹¹。

しかし、反実仮想の場合、実在の物個体について何事かが主張されているにもかかわらず、「現実と異なる事態を想定する」というその定義からして当然のことだが、) 履歴への追加はやはり不可能である。例えば、イチローについて「野球をしていなかったら」という想定をしても、この想定の内容が実在のイチローの履歴に追加されることは当然ありえない。とすれば、「履歴への追加の不可能性」だけでは「実在の物個体が指示されていない」とするには不十分ではないか。

この点について考えてみるために、「ホームズの住むロンドンは19世紀に実在したロンドンなのか否か」という問いを立ててみよう。ホームズ物語の中の「ロンドン」という場所にはテムズ川が流れているし、大英博物館も存在するが、無論、物語の中で何が起ころうとそれが実在のロンドンの歴史に書き加えられることはない。つまり、履歴への追加はやはり不可能である。しかし、ホームズ物語に登場する「ロンドン」にはこの他にも重要な特徴がある。ホームズの事務所は「ベーカー街221B番地」にあったのだが、実在のベーカー街は19世紀当時85番地までしかなかった。もしホームズの住む「ロンドン」が実在の19世紀のロンドンなら、ホームズの事務所はロンドンの中にあるが実在しない場所に存在することになる。そのようなことは不可能である。それは10階建てのビルの15階に事務所を置くのが不可能なのと同様である。しかし、本節(1)で前述したように、フィクションにおける物個体の細部は不確定であるから、フィクションに現れる「ロンドン」も記述されていない細部は不確定であろう。そして、この細部の不確定性が、ホームズが「ロンドン」に住むことを可能にする。つまり、細部が不確定だから、現実には85番地までしかなかったベーカー街にホームズの事務所が存在しうるのである。逆に、もし細部が確定していたら、そもそもホームズが活動する余地もないだろう。というのは、実在のベーカー街にホームズが現れたことはこれまで一度もないからである。要するに、実在する物個体の名前がフィクションへ登場することは、フィクションにおける物個体の細部が不確定であることによって初めて可能になる。しかし、その物個体が実在する物個体であるなら、その細部は確定しているはずである。したがって、実在する物個体の名前がフィクションに登場していても、それは実在する物個体を指示していない、と考えるべきである。

また、フィクションに変更明示の原則が伴わないことも、実在する物個体の名前が登場するフィクションにとって有利に働いている。もしフィクションにこの原則が伴っていたら、「実在のペーカー街には221B番地はないが、この物語ではそれがあことにしよう」と最初に明示しなければならなくなる。これは、ホームズ物語をあたかも現実の話であるがごとく読者に感じさせることを著しく妨げるだろう。反実仮想の場合は変更が明示されるから、描かれている事態が現実と異なることは（したがって、実在の物個体の履歴への追加が不可能であることも）読者にとって最初から明らかである。これに対し、フィクションでは、架空の人物であるホームズが実在の都市ロンドンで活動したかのごとく読者に思わせるように描かれる。つまり、フィクションは現実と異なる事態をあたかも現実であるかのごとく描く。フィクションにおけるこの逆説を可能にしているのが細部の不確定性と変更明示の不要性なのである。

また、「ロンドンが赤道直下にあつて、住民がみな日本語を話している」というような極端な設定も、探偵小説では無理かもしれないが、SF小説ならリアリティを持ちうる。現実から乖離できる度合いがこのようにジャンルによって異なるのも、フィクションに現れる地名が実在の場所をもともと指示していないからであろう。これに対し、「フィクションに現れるロンドンは実在のロンドンであるが、実在のロンドンに関する現実の事実にどこまでコミットするかはジャンルによって異なる」と主張する論者¹²もいる。しかし、そのように考えるなら、「赤道直下にあつて住民がみな日本語を話しているロンドン」ですら、実在のロンドンだということになるが、それは無理な主張であろう。それとも、そこまで似ていなかったらもう実在のロンドンではないということになるのか。とすれば、どのくらい似ていなかったら実在のロンドンでなくなるのか。この問いに答えようとするよりも、「フィクションに現れるロンドンはどれも実在のロンドンではない」と考える方がよいだろう¹³。

以上取り上げた「王貞治」という人物名と「ロンドン」という地名はどちらも単称名辞であるが、フィクションの中で使われる一般名辞についてはどう考えるべきか。フィクションの中で性質を意味する一般名辞（「赤い」など）や動作を意味する一般名辞（「走る」など）が使われる場合、それらの語は現実を記述する場合と同じ意味を持つ。それらの語はフィクションの世界を描くための

絵の具のようなものであり、その意味まで変更されれば、我々はフィクションを理解することができないであろう。しかし、「赤い」という性質や「走る」という動作は（現実世界においてもフィクションにおいても）物個体ではなく、それらの語の意味が現実世界とフィクションとで同じだからといって、フィクションに実在の物個体が現れているということにはならない¹⁴。

では、「カンガルー」のような自然種を意味する一般名辞がフィクションの中で使われる場合はどうか。竜が実在物でないのは確かだが、「カンガルー」という一般名辞はフィクションにおいても実在のカンガルーを意味しているのではないのか。そうではない。というのは、まず、第一に、実在のカンガルーが持たない性質を持っているカンガルー（例えば「日本語を話せるカンガルー」）がフィクションには断りなしに、即ち、変更を明示することなく、登場できる。第二に、フィクションにおけるカンガルーはその細部が不確定であるがゆえに、ストーリーが進むうちに、そのカンガルーが実は大昔に宇宙からやって来た宇宙人だったということになっても読者はそれを受け入れるだろう。そして、第三に、フィクションの中のカンガルーが日本語を話そうが、宇宙人であろうが、それは現実世界に存在するカンガルーの履歴に当然何も付け加えない。このように、「変更明示の不要性」、「細部の不確定性」、「履歴への追加の不可能性」という特徴は、実在の自然種を意味する一般名辞がフィクションの中で使われる場合にも当てはまる。とすれば、そのような一般名辞もやはり実在の物個体を意味していない¹⁵と考えるべきである。

では、実在の物個体とフィクションに登場する（同じ名前の）物個体とはいかなる関係にあるのか。それはモデルとキャラクターという関係である。即ち、その場合、実在の物個体をモデルとしてフィクション内のキャラクター（人物・場所・自然種）は創られたのである。それゆえ、両者の間には相当の類似性がある。しかし、ずれもある。というより、ずれがなければならぬ。なぜなら、ずれがなければ現実と違った話を作ることができなくなるからである。したがって、細部がぼかしてあること、即ち、細部の不確定性がキャラクターには必須である。そして、キャラクターがあたかも実在の物個体であるかのごとく読者に思わせるためには、どのようなずれがあるかを最初に明示する必要があってはならない（即ち、変更明示は不要でなければならない）のである。

(3) 性質間の含意関係

ところで、反実仮想とフィクションのどちらにも、「明示的に記述された性質が（記述されていない）他の性質を含意する」という関係、即ち、性質間の含意関係がある。例えば、「もしイチローが野球をしなかったら」という反実仮想においては、「野球をしないイチローがボールを投げる速度は実在のイチローよりはるかに遅い」ということが（記述されていない）推論できるのである。また、ホームズ物語にはパディントン駅（というロンドンに実在する駅）が登場するが、それが駅である以上、その駅からレールが外へ延びていることは（記述されていない）推論できるのである。しかし、性質間の含意関係はフィクションにおいては相当にルーズでありうる。だから、「パディントン駅はあるが、レールはない」という設定もフィクションのジャンルによっては可能である。例えば、「パディントン駅から出る列車はすべてタイヤを持ち列車専用道路を走っている」という設定はありうる。さらに、フィクションにおいては自然法則に反すると思われる設定すら可能である。その結果、突き詰めると矛盾が生じそうな設定のフィクション（例えば、現実と同じ物理法則が成り立ちつつ、光よりも速い乗り物が登場するフィクション）が書かれることもある。しかし、表面化しない矛盾はフィクションにおいてはしばしば見過ごされる。それは、フィクションの細部は不確定であるがゆえに、ひょっとしたら予想外の仕方ですのような矛盾は解消されているかもしれないからであろう。

他方、反実仮想において、一つの変更性質がどんな他の性質の変更を含意するかを一つながりのストーリーにすることができる。例えば、「もし日本の首都が京都のままだったら」という反実仮想は、「日本の首都は東京ではなく、京都である」という一つの変更性質だけを明示しているが、非常に多くの他の性質を含意しうる。どんな性質が含意されるかを推論するだけで極めて長いストーリーができる。そして、そのストーリーを、「京都が日本の首都だ」という設定のフィクションから区別することは困難であるかもしれない。つまり、反実仮想とフィクションの違いが曖昧になるケースがあるかもしれない。

しかし、一つの同じ作品が異なった2つの読み方をされることは可能である。即ち、或る人には反実仮想に基づくストーリーとして読まれ、別の人にはフィ

クションとして読まれるということは可能である。そして、だからといって、反実仮想とフィクションの概念的な区別がなくなるわけではない。というのは、フィクションは、「性質間の含意関係がルーズである」、「物個体の細部が不確定である」、「変更明示の原則を伴わない」という前述の特徴によって反実仮想から区別されるとともに、反実仮想のポイントがあくまでも**実在の物個体が現実**に持っている性質や関係に関する主張を行なう（例えば「東京が首都であること」と「日本の現状」とを関連付ける）ことであるのに対し、フィクションでは**実在の物個体がモデルだとしてもあくまでも架空の物個体からなる世界**について（あたかも現実であるかのごとく）物語ることがその目的だという点に大きな違いがあるからである¹⁶。

以上要するに、フィクションの中で架空の人物名・地名・自然種名が使われる場合はもちろん、**実在の人物名・地名・自然種名が使われる場合も、そこに実在の物個体は現れていない。フィクションに現れる物個体は実在の物個体ではなく、せいぜい実在の物個体をモデルとするキャラクターである。**

4. 結論

全体を振り返る。

反実仮想は、その度ごとに、現実世界に実在する物個体について、当該物個体が持っている性質を変更性質と固定性質とに分ける。そうすることによって、反実仮想文は、実在する物個体が**現実**に持っている性質や関係について何事かを主張する。(2節(1)(2))。このことは、実在する物個体の**非実在**を想定する場合や、逆に、**実在しない物個体の実在**を想定する場合も同様である。(2節(3))。

物個体の細部が反実仮想では**確定**しているのに対し、フィクションでは**不確定**である。また、変更明示の原則が反実仮想にはあるが、フィクションにはない。(3節(1))。性質間の含意関係は両者にあるが、フィクションにおける含意関係はルーズである。フィクションのポイントは**架空の物個体からなる世界**についてあたかも**現実**であるかのごとく物語ることである。(3節(3))。実在する物個体の名前がフィクションに登場できるのは、フィクションの持つ「細部の

不確定性」、「変更明示の不要性」、「実在する物個体の履歴への追加の不可能性」という特徴のゆえである。フィクションに現れる物個体は実在の物個体ではなく、せいぜい実在の物個体をモデルとするキャラクターである。(3節(2))。

以上より、「実在する物個体が反実仮想に必ず現れるのに対し、フィクションにはまったく現れない」という結論が得られる。

註

- 1 個体には物個体と出来事個体とがある。両者には、①指示できる、②数えられる、③(同義的でない)再記述を与えうる、という共通な特徴があるが、他方、物個体の変化・消滅・復活可能であるのに対し、出来事個体は変化・消滅・復活可能でないという違いがある。両者の違いについては[伊佐敷 2005a]、[伊佐敷 2005b]、[伊佐敷 2006]を参照せよ。
- 2 ここで言う「反実仮想」は、文の前半部分(「～たら」の部分)を指している。文全体は「反実仮想文」と呼ぶことにする。
- 3 フィクションには、小説・漫画・神話・伝説・おとぎ話・映画・演劇・テレビドラマなどいろいろな種類のものがある。
- 4 原因や構造を述べるために反実仮想文が用いられるのはなぜなのか。また、原因や構造の存在論的身分は何か。これらはそれ自体追究すべき別の問題である。
- 5 ただし、野球をしないことに伴って変更されなければならない性質もありうる。この点については註10を参照せよ。
- 6 また、その想定された対象が元の実在する物個体に「似ている」からでもない。もしそうなら、他にもっと似ている物個体が現実世界に実在するなら、その別の物個体の話をしていることになるが、それは我々が反実仮想において行なっていることではない。
- 7 「可能世界」概念を使って言い直せば、反実仮想は行なわれるたびに現実世界から出発し直すのであって、一つの可能世界からさらに他の可能世界へ遷移するというのではない。それゆえ、「チザムのパラドックス」は生ぜず、したがって、チザムのように個体的本質を要請する必要もない。チザムのパラドックスについては[Chisholm 1967]を参照せよ。それは、「別の可能世界に存在している最も似ている物個体を迎って多数の可能世界を経ていく。すると、実在のアダムから辿られた先に実在のノアと全く同じ性質の人物がおり、かつ、実在のノアから辿られた先に実在のアダムと全く同じ性質の人物がいる、そのような一つの可能世界に辿り着く」としよう。このとき、アダムとノアは性質がすべて入れ替わっておりながら、それぞれは同一人物であり続けている」というパラドックスである。チザムはアダムの個体的本質が途中のどこかで失われ、それゆえ、もはや、途中からアダムではなくなっていると考えることによってこのパラドックスを解決しようとする。
「可能世界」概念は用心して使わないと、我々が現に行なっている反実仮想やフィクションの実態からずれてしまう。このパラドックスはその一つの見本であろう。
- 8 この主張が正しければ、ルイス ([Lewis 1973, p.39]) の対応者(counterpart)理論(即ち、

「もしイチローが野球をしていなかったら」という反実仮想に現れる「イチロー」は実在のイチローではなく、その対応者であると主張する理論)は間違いだということになる。

- ⁹ この対比は、パーソンズ ([Parsons 1980, p.47]) が「サマンサは牛を探している(Samantha is looking for a cow.）」という文に対して行なった「de re 読み」と「de dicto 読み」の対比に平行している。前者は「逃げ出した飼い牛を探している」という読み方であり、後者は「新しい牛を一頭狩ろうとしている」という読み方である。前者では探している牛の性質は細部まで確定しているが、後者では不確定である。

また、フィクションのこの特徴を[三浦 1995, p.27]は「虚構世界の不完全性」と呼び、[佐々木 1986, pp.211-213]は「虚構の言述の中間位相性」と呼ぶ。

- ¹⁰ 「原則的」と書いたのは、明示された変更性質から推論できる部分については、記述されていなくても変更性質となる場合があるからである。例えば、もしカンガルーに尻尾がなかったら、尻尾と胴体がつながっていた部分に(かつてなかった)皮膚と毛が生えているはずである。この点については、3節(3)で後述する「性質間の含意関係」を参照せよ。

- ¹¹ パーソンズ ([Parsons 1980, pp.59-60]) は、「会う」という2項関係に対して対称性を否定することによって、「会う」ことについての履歴への追加の不可能性を処理しようとする。即ち、「ホームズはグラッドストーン首相(実在のイギリス首相)と会ったことがある」という文から「グラッドストーン首相はホームズに会ったことがある」という文は帰結しない、(そして、前者の文は真で後者は偽だ、)と主張する。しかし、これはいかにもアドホックな処理であるから採れない。

- ¹² これはサール ([Searle 1979, pp.72-73]) の主張である。また、パーソンズ ([Parsons 1980, pp.51-52]) も、フィクション中の「ロンドン」は実在のロンドンであると主張する。

- ¹³ フィクションの舞台としての「地球」についても同様である。ほとんどのフィクションは地球のどこかを舞台にしているが、その地球は我々が住んでいるこの実在する地球ではないと考えるべきである。『ウルトラマン』というテレビドラマの最終回で、ウルトラマンは夕焼け空の中を小さな光になって地球から飛び去って行くのだが、思わず窓際に駆け寄った少年が西の空を見上げたときそのような光はどこにも見当たらなかった。ウルトラマンが去って行った「地球」は我々が住んでいるこの実在する地球ではないことを、少年は軽い失望とともに悟ったのである。(この少年は筆者である。)

- ¹⁴ 尤も、性質と個体のどちらに属するか曖昧な事例もある。例えば、「火」や「熱」などである。この点に関しては留保する。

- ¹⁵ 念のために付言するが、フィクションの中のカンガルーが実在のカンガルーでないというのは、前者がカンガルーの本質的性質を失っているからという理由ではない。クリプキ ([Kripke 1972]) やパトナム ([Putnam 1975]) のような自然種に関する本質主義をここで採る必要はない。

- ¹⁶ なお、フィクションについての反実仮想(「もしホームズが結婚していたら」)、フィクション内フィクション(劇中劇)、フィクション内反実仮想(「ワトソン君、君がもっと注意深かったら」というホームズのせりふ)などの複合的な事例、および、フィクションと現実とをまたぐ文(「ホームズはドイルが創作した探偵だ」「ホームズは実在しない」)についてはすべて扱いを保留する。

文献表

- Chisholm, R. (1967) "Identity through Possible Worlds: Some Questions," *Noûs*, vol.1, pp.1-8, reprinted in Loux, M., ed., *The Possible and the Actual*, Cornell University Press, 1979, pp.80-87, and in Kim, J. and Sosa, E., eds., *Metaphysics: An Anthology*, Blackwell, 1999, pp.149-153.
- 伊佐敷隆弘 (2005a) 「過去の確定性」日本哲学会編『哲学』第 56 号, pp.130-141。
- 伊佐敷隆弘 (2005b) 「現在は瞬間か」日本科学哲学会編『科学哲学』第 38 卷 1 号, pp.31-45。
- 伊佐敷隆弘 (2006) 「出来事と時間：経験の場としての時間的パースペクティブにおける「過去」と「現在」の生成」西日本哲学会編『西日本哲学会年報』第 14 号, pp.107-127。
- 伊佐敷隆弘 (2007) 「テイラーの運命論について」宮崎大学教育文化学部『紀要 人文科学』第 16 号, pp.45-66。
- Kripke, S. (1972) *Naming and Necessity*, Harvard University Press.
- Lewis, D. (1973) *Counterfactuals*, Basil Blackwell.
- 三浦俊彦 (1995) 『虚構世界の存在論』勁草書房。
- Parsons, T. (1980) *Nonexistent Objects*, Yale University Press.
- Putnam, H. (1975) "The Meaning of 'Meaning,'" *Mind, Language and Reality: Philosophical Papers, Volume 2*, Cambridge University Press, pp.215-271.
- 佐々木健一 (1986) 「虚構と真」『新・岩波講座哲学 3』岩波書店。
- Searle, J. R. (1979) "The Logical Status of Fictional Discourse," *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge University Press, pp.58-75.

付記

この論文は2007年度哲学若手研究者フォーラム（2007年7月21日）のテーマレクチャー「分析哲学における存在論の現在」において行なった講演の原稿から一部分を抜き出し加筆修正したものである。講演においては「現実性と可能性——フィクション・反実仮想・未来時制をめぐって——」というもう少し広い話題について論じた。その際、「可能性概念が多様であるのに対し、現実性概念は単一である。かつ、多様な可能性概念を区別するためには現実性概念が必要だが、逆の関係はない。それゆえ、現実性概念の方が可能性概念よりも基礎

的な概念である」と主張した。さらに、「真理様相のうち、現実性概念が最も基礎的で、その上に可能性概念が、さらにその上に必然性（および偶然性）概念が成立しており、したがって、世界の本来の姿は、可能性も必然性も偶然性もなく、すべてがあるがままにあり、起こるがままに起こっている、というものである」という見込みを述べた。しかし、今回論文としてまとめるにあたり、「反実仮想とフィクション」に議論を限定するとともに、当日フロアーから寄せられた質問への答えをできるだけ含むよう努めた。

また、当日の講演の冒頭に述べたように、この講演は時間様相（現在・過去・未来）に関する研究の一部をなすものである。私は時間について出来事個体論からアプローチして来た。その結果、「出来事個体は過去に関してしか存在しない」、「出来事個体が出現するたびに過去が出現する」、「出来事個体は変化・消滅・復活しない。このことが過去の確定性の源泉である」、「過去の出現に伴い、過去でないものとしての現在が、その都度、異なる幅をもって出現する」、「現在過去未来の区別以前の、我々の経験の場としての時間的パースペクティブにおいて、物個体は同一性を保ちつつ絶え間なく変化している。この切れ目なく生じては消える変化を、完了したひとまとまりのものとしてすることが出来事個体を出現させることである。それゆえ、出来事個体の存在はそこに含まれる物個体の存在と我々による出来事個体への指示に依存している」などの結論を得た。そして、「経験の場としての時間的パースペクティブとは何か」を明らかにするために、「現実性」「可能性」「必然性」「偶然性」などの真理様相について検討する必要が生じたのである。私の時間研究については、文献表に挙げた拙論を参照していただければありがたい。

フォーラム当日は、多数の若手哲学研究者が全国から集まっているのを見て、日本における哲学研究の将来について心強く感じた。世話人の皆様をはじめ、フォーラムに参加された皆様に感謝を申し上げたい。

※本論文は平成17～19年度科学研究費補助金・基盤研究(c)課題番号17520022の研究成果の一部である。

(いさしき たかひろ／宮崎大学)